「イエスに従う人たち」（ルカによる福音書五章一～一一節）

1　イエスに従う

信仰とは何か、信仰によって生きるとはどういうことか、こうした問いはだれもがもちますし、考えることをいたします。しかし教会とは何か、教会に加えられて生きるとはどういうことか、そうしたことを問うたり考えたりする機会はあまり多くないように思います。

もちろんいま私が何か、教会とは何かという問題を立てて、それに難しい答えを与えようというのではありません。

そうではなくて、今日の聖書箇所を読んで、イエス・キリストと教会とのつながりには切っても切れないものがある、本質的には、イエスご自身がこれを欲し、これを立て、これにご自身の働きの継続を託されたのだということが、改めて強く印象づけられるということです。

今日の箇所に伝えられているのは、途中色んなことがあったようですが、要するにペトロが、そして彼と共に、ヤコブとヨハネが、後に初代教会を支えた彼ら使徒たちがイエスに従う者となった、福音の宣教の奉仕者になったということです。最後の二節をお読みします。

シモンの仲間、ゼベダイの子のヤコブもヨハネも同様だった。すると、イエスはシモンに言われた。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる」。そこで、彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った（一〇～一一節）。

「彼らは・・・イエスに従った」、これが今日の箇所の結びです。人間をとる漁師というような印象深い言葉は後で取り上げることにして、ガリラヤで始まったイエスの宣教が、ここに来てはじめて相応しい応答（レスポンス）を見いだしたことを、何より最初に確認すべきです。

すでに前の章で私どもは、イエスの宣教が会堂の礼拝という場ではじまったことを聞いています。そしてこの宣教という言葉の中に、たんに言葉による福音の伝達だけでなく、病人の癒やし、あるいは悪霊につかれた者の癒やしの含まれることもすでに見たところです。

しかし私どもがこれまで見てきたように、ナザレの会堂でも、カファルナウムの会堂でも、さらにはその町の中でも、イエスの宣教に対する相応しい応答は見いだせませんでした。むしろ私どもが見たのは、イエスの癒やしのわざを、自分たちだけのものとしようとする人々のエゴイズムです。「自分たちから離れて行かないようにと（イエスを）しきりに引き止めた」（四・四二）というのがそれでした。それと対照的なのですが、今日の箇所でペトロが「主よ、わたしから離れてください」（八節）と言っているところがあります。しかしそう言ったペトロにここでイエスは「今から後、あなたは人間をとる漁師になる」と語ります。「なる」とは未来形です。約束です。

これがペトロに対する招きの言葉です。そして彼は、舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従ったのです。

従う、という言葉は、とくに福音書では重要な言葉です。元の意味は、同じ道、です。イエスと同じ道を歩む、それが従うです。イエスの福音は、それを信じ、その信仰に従って歩む者たちを起こします。教会の基礎が築かれたといっていいと思います。イエスはただたんに信仰へとペトロを招いたのではありません。人間をとる漁師、教会による神への奉仕へと招いたのです。そうした教会への招き、これがイエスの福音のもたらした実りでした。

2　お言葉ですから

イエスによる招き、それに対するペトロの応答、それが起こったのは、ガリラヤ湖畔、別名ゲネサレト湖畔です。

今日の箇所の書き出しのところを見ると、イエスとペトロとの関わりは、偶然であったようにも見えます。

イエスの話を聞こうとして押しかけてきた群衆、イエスはとっさに、そこにあった舟をこぎ出させ、いわば演台に仕立てて、舟の中に腰を降ろして岸辺の群衆に教えられたとあります。

その舟の一艘はペトロの所有でした。イエスとペトロは、先にペトロのしゅうとめをイエスが癒やしたということもあり、知らない関係ではなかったと思いますが、群衆が押し寄せてきたときにも、それとは無関係に「網を洗っていた」とありますので、イエスに対するペトロの特別な関心のようなものをここから読み取ることは必ずしもできません。

反対に網を洗うというのは、漁師にとって、仕事のうちです。ですから仕事の最中のペトロにイエスが声をかけたのです。わたしを乗せて岸から少しこぎ出してくれるように頼んだ、とあります。ヨハネによる福音書に、イエスが、サマリアの女に水を飲ませてくれるように頼み、それをきっかけに、あの場合は、命の水という話までなりイエスが自身をメシアとして現したことを思い出します（四章）。イエスのとった行動、それは、とっさにではなく、偶然ではなく、選び、神の決意に基づいていたと言うべき、また言ってよいと思います。

> 話し終わったとき、シモンに、「沖にこぎ出して網を降ろし、漁をしなさい」と言われた。シモンは、「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましょう」と答えた。そして、漁師たちがそのとおりにすると、おびただしい魚がかかり、網が破れそうになった。そこで、もう一そうの舟にいる仲間に合図して、来て手を貸してくれるように頼んだ。彼らは来て、二そうの舟を魚で一杯にしたので、舟は沈みそうになった（四～七節）。

話しが終わって、イエスを乗せて、また岸に戻ったのか、それともそのまま沖へとこぎ出したのか、はっきりしませんが、少なくともペトロははじめイエスのために舟

をこいで行き、イエスが舟から岸の群衆に語っているときも、舟の中にいて、イエスの話しに耳を傾けていた。彼はこうしていまや福音の聞き手とされたといってもよいと思います。

「沖へこぎ出して」の「沖」というのは、もとの言葉では、深いところです。いま網を降ろして漁をせよというのは、漁業を生業とするペトロにとってあまりに非常識なことでした。今は昼です。漁をする時間でも状況でもありません。昨晩もとれなかったのです。この人が何を考えているのか、ペトロには分かりませんでした。先ほどまでは、舟の中で、心打たれながら聞いていたのに、突然のイエスの言葉にペトロは理解に苦しんでいます。

疑問に思いながらも、しかしペトロはイエスの言葉に従います。自分の常識に逆らって網を降ろしたのです。「お言葉ですから、網を降ろしてみましょう」。丁度マリアが天使の受胎告知に、わたしは主のはしため、お言葉どおり、この身になりますようにと語ったようにです（一・三八）。「網を降ろしてみましょう」の主語は「わたしたち」ではなくて「わたし」です。他の人はともかく、わたしは網を降ろしてみますと言うのです。私の理性でも私の感性でもなく、他人がしているからでもなく、主であるあなたが語ってくださったことに従います。一種の人間的な素直さとも言えます。しかしそれだけではありません、「しかしお言葉ですから」という言葉には、イエスに対するペトロの信頼が響いています。いま魚なんかとれるはずがない、しかし彼は常識を乗り越え、悲観主義を乗り越えて、イエスの言葉にゆだねます。今日の聖書から私どもが聞くのは、神は網がやぶれそうになるほどの豊漁をもってペトロに答え、栄光を現されたということです。

3　人間をとる漁師

ご承知のように四つの福音書には、イエスの弟子の召命のこと、どのような次第でイエスに従う者となったのか、書いてあります。一二弟子みんなのことが同じように出ているのではありませんが、しかしどれも教えるところ多いものです。今日の箇所に書いてあることは他にはないものです。

> これを見たシモン・ペトロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と言った。とれた魚にシモンも一緒にいた者も皆驚いたからである（八～九節）。

舟が沈みそうになるほどの大漁を目の当たりにして、ペトロはこう叫びます、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」。たくさんの魚がとれたことに「驚いた」からだと、説明されています。「驚いた」というのは、驚きがおそったとなります。ペトロだけでない、ヤコブもヨハネも驚き、一瞬、戦慄が走ったのです。

ペトロは、自分のいま目の前にいるのは、たんに一人の「先生」、一人の優れた人物ではなく、それ以上の方、神、主であることを深く悟ったと言わなければなりません。その帰結が「わたしは罪深い者です」という言葉です。これは、そのまま訳せば、

「わたしは罪の人間（罪人）です」となります。その方の前では、私どものすべてが、あらわである方の前に立っているという深い恐れの自覚です。

ペトロがここで、何か具体的な、あれこれの罪を思い出して、自分を罪人ですと言ったのではないと思います。あれこれの罪のその根、その出所、それは、自分そのものが罪人だということにあります。

イエスの「恐れることはない」（一〇節）という言葉は、まさにそのような罪人への新しい招きの言葉でした。イエスが他のところで弟子に語ったように、イエスは「罪人を招いて悔い改めさせる」（五・三二）ために来られたのです。罪深いことを見越して、なおもイエスは招いてくださっていると、考えるほかなく、そう考えることが私どもに許されます。

はじめに申し上げたように、イエスはここではじめてイエスの福音を受けとめた者と出会ったのです。そして彼を弟子として招かれます。決してペトロ自身の能力や決意が評価されたのではありません。ペトロが従うことを可能としたのはイエスの招き、神の招きです。

イエスはこれによって、その宣教の始まりにおいて、後の教会の基礎づくりをされたのだと言ってよいと思います。イエスの働きが、彼らによって継続されていくようにです。イエスの働きは神の国を宣べ伝えることです。この福音の宣教が教会によって担われていく、担われていかなければなりません。

そしてそれを担う者がいつも立派な人であるということが期待され、求められているのではありません。そうではなくて、いつも罪深いものだ、神の赦しなしに立ちゆかない者だという思いをもっていることが期待されています。教会とは赦された罪人たちの交わりにほかなりません。その真ん中に十字架と復活のイエスがいつも立っている群れ、神の民です。

今日の箇所からも明らかなように、イエスは、たとえば町の真中で、人が集まるところで、先生や知識人、お金持ちを集めて弟子とし、教会の基礎づくりをしようとしたわけではありませんでした。むしろ労働者のもとに赴き、彼らを、しかもその働いている只中から召し出したのです。

使徒パウロの有名な言葉があります。「わたしたちは、この宝を土の器の中にもっている。その計り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである」（Ⅱコリント四・七）。まさに土の器にすぎない私どもにも、大きな使命が与えられています。

ペトロに対して、イエスは、こう語られたのです。「今から後、あなたは人間をとる漁師になる」。「人間をとる漁師」。漁師であったペトロたちには、その意味は明らかであったと思います。この言い回しは聖書ではしばしば戦争や狩猟のさいに使われています（ヨシュア二・一三）。「生け捕り」というような意味です。しかし難しく考える必要はありません。一人でも多くの人を神の恵みの支配のもとで生きるように招くということです。まことの神と共に人生を歩むように招くということです。福音を宣べ伝えること、伝道することです。イエスご自身の働きが、ペトロらに、そして教会に委ねられたのです。

（二〇二一・二・七）